

香港日本人学校大埔校における指導計画と特色

前香港日本人学校小学部大埔校 教諭

愛知県名古屋市立宝小学校 教諭 辻 昇 吾

キーワード：在外教育施設、香港、現地事情、指導計画、国際学級

1. 赴任地（香港）の様子

香港は、中華人民共和国にある特別行政区である。1998年に返還される前までは、イギリス領であったため、外国人や英語を話せる人も非常に多く、地名や駅などが英語と広東語の2か国表記の場合もある。人口は、狭い土地に700万人以上の人々が住んでいるため、世界有数の人口密度になり、自由貿易が認められている地域であるため、世界中の商品がここに集まり、貿易、金融、運輸関係の仕事をしている人が非常に多い。そんな香港には、日系企業の進出も多く、日本の子どもたちも多く学んでいる。よって、在外教育施設としても規模が大きくなり、香港日本人学校は、小学部としては香港校と大埔校の2校がある。私が勤務したのは、大埔校で、香港の中でも、比較的中国本土に近い郊外にある。

以上のような、赴任地の事情から、英語教育や国際理解に対するニーズが非常に強い。また、現地の学校やインターナショナルスクールとの違いをつけるために、特色的な教育活動も多く行っている。ここでは、香港日本人学校大埔校における、指導計画と特色についてまとめる。

2. 学校の様子

(1) 児童の構成

香港日本人学校大埔校の全児童数は、434人（平成27年度7月時点）である。多くが日系企業の駐在員の子ども達と、現地の親を片親（或いは両親）に持つ児童とで構成されている。他の日本人学校同様、転出入が非常に多い。また、一部の児童には、日常会話で使う言葉との違いから、日本語の遅れがみられることもある。そんな児童のために、学校内ではあるが別組織として有料の日本語教室が開校されていて、その教室とも連携を取りながら教育活動を行っている。

(2) 特色を生かした教育

学校の、基本となる教育課程は、日本の学習指導要領である。日本で最もよく使われている教科書を用いて、日本で行われている教育に非常に近い学習を行っている。

それに加えて、本校の大きな特色として、英語教育に力を入れていることが挙げられる。英語の時間は、赴任当初の平成25年度と平成26年度は、週3コマ（年間105時間）であった。しかし、少しずつニーズが上がり、平成27年度からは、全学年、毎日1時間ずつの週5コマ（年間175時間）行われている。通常の学習指導要領分の時間数を行った上で、英語を行うので、授業時数がとても多くなる。余剰の時間も目一杯使って、朝8時20分～15時30分までの授業を、毎日行っている。



教室での通常授業のようす

その他の特徴としては、体育と図工で日本人以外の専門スタッフによる指導が挙げられる。学校の中に、香港としては珍しい室内型のプールがあることから、体育ではプール指導を年間を通して行っている。指導は、外部委託しており、専門のスタッフと担任教諭が協力して指導に当たっている。そこで使われる言語は、現地スタッフと子どもたちとの間の共通語である英語である。また、図工は3年以上が外国人教師が英語で行う「イメージング指導」という

形で行われ、担当教師が英語で授業を行っている。

(3) 学校行事

大きな学校行事として、1学期に行われる「大縄大会」、2学期の「運動会」、3学期のオープンスクールである「ランタナ祭」がある。その他にも、校外学習や〇〇集会、縦割り班による活動などが行われている所などは、日本の多くの学校に近いといえる。

香港という場所柄、体を存分に動かせる機会が少ないことから、1学期におこなわれる「大縄大会」は、子どもたちも教師もすごい熱の入れようになり、盛り上がる。日本人が多く居住する地区の近くの公園では、その時期になると、みんなの遊びが大縄になるほどである。

運動会は学校の運動場が狭いため、他のグラウンドを借りて行われる。しっかりとした設備の競技場で、保護者の方の参加率も非常に高く、これも大変盛り上がる。オープンスクールである「ランタナ祭」についても、私立学校であるという性質上、学校を一般の方々にアピールする良い機会としてとらえられているので、子どもたちも先生も、熱の入り方がすごい。



広いグラウンドを借りて行われる運動会のようす

(4) 国際学級との交流

学校の大きな特徴の1つとして、国際学級（International Section = 以下ISと略す）があるということがあげられる。イギリス、香港、カナダ、日本と、様々な国籍の子どもたちが、英語で授業を受けている。カリキュラムは、国際バカロレアで行われており、私たちの学校（ISから見ると、JS = Japanese Section「日本語コース」、以下JSと略す）のようすとくらべると、自由な環境の中で教育を受けている。何度か、授業を見させていただいたことがあるのだが、算数の授業では、その子の実態に応じた個別課題を集団の中で、それぞれのペースに合わせて別々に行っていた。また、国語の授業では、与えられた題材文について、自分の考えをまとめたり、グループで発表し合ったりするなどの学習が中心であった。

JSとISは同じ敷地内（5階建ての建物のうち1フロアがIS）にあるのだが、時間割もほとんどの学校行事も、そして職員室までもが別になっている。また、休み時間が重なっているため、サッカーや鬼ごっこなどで、子どもたちが自主的に一緒に遊ぶようとする場面も多く見られる。ただ、文化の違いと、欧米的な自由奔放な指導と違いから、ルールの違いやお互いの価値観の違いなどから、トラブルになることも多くある。同じ学校敷地内にありながらも、一緒に生活していくことには困難が多くあるというのが実情である。

とは言え、同じ学校内に国際学級があることは、学校にとって大きな強みであり、その良さを生かして、交流活動は盛んに行われている。例えば3年生は、年に1度のIS交流として、図工の巨大作品を一緒に作ったり、交流ゲームをしたりしている。6年生になると、混合のグループ活動を行い、お互いにインタビューをしてまとめる活動を行っている。このように、同じ場所で時間を共にして、時には一緒に学びあう中で、子どもたちは少しずつお互いの良さを認め合い、学校生活を送っている。

(5) 特別支援教育

最後に、特別支援教育について記述する。日本の学校と同様に、学校には数パーセントの児童が発達障害を疑われた児童がいる。よって、特別な支援が必要となるのだが、私立学校であるという立場から、予算の公平性を考えた際に、特別支援学級を設置するということが非常に困難である。そのため、本校の特別支援教育は、通級指導で行われている。通級指導では、「自立活動」を中心に、個に応じた指導を抜き出しで行っている。このあたりは、日本の発達障害通級指導教室の形式に近いものであり、平成27年7月の時点では、6人の児童が、週1～5時間程度の通級による個別指導を受けている。

通級指導が原則である以上、児童の在籍は、当然、通常学級になる。そこで問題になってくるのは、養護学校や特別支援学級への就学指導が必要となる程度の障害を持っている児童についてである。特別支援学級がないと

いう現状のため、残念なことに、そういった児童については、受け入れを断っているというのが実際である。受け入れが断られた児童については、適切な教育を受けるため、家族が離れ離れになるのを承知で日本に帰国するか、現地の学校を探して入学しなくてはならないので、保護者は苦渋の決断をしなくてはならない。海外日本人学校とはいえ、決断を下す側としてもとても心が痛むところであった。

3. 終わりに

このように、香港日本人学校は現地の実情に合わせて、特色のある教育を行っている。私は、3年間この町に住み、働かせていただき、様々なことを経験でき、本当に幸せだった。そんな思いをすることができたことは、多くの仲間たちに支えられたことと、現地を少しでも理解し教育活動に生かそうと努力したからであると考えている。「与えられた環境を愛し、与えられた場所で精いっぱい輝く」ということは、赴任に先立って先輩の教員から伝えられたことである。ここで得た経験を活かして、所属自治体に戻ってからも、その姿勢を忘れずにしっかりと教育活動に生かしていきたい。